

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：35305

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520350

研究課題名(和文) 大衆文化と19世紀アメリカ文学にみる視覚の変容に関する学際的研究

研究課題名(英文) A Interdisciplinary Research on Mass Culture and the Changing Sense of Sight in American Literature in the 19th Century

研究代表者

中村 善雄 (Nakamura, Yoshio)

ノートルダム清心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：00361931

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、19世紀の大衆娯楽メディアであるファンタズマゴリア、パノラマ、ディオラマ、写真、スペクタクルとしての万国博覧会に焦点を当て、これらの視覚装置がヘンリー・ジェイムズやナサニエル・ホーソーンといったアメリカ作家の心理や眼差しに及ぼす影響や作品の主題、文体やイメージへの作用を検証した。結果、大衆的な視覚メディアは単なるガジェットとして作品に導入されるのではなく、登場人物の性質や作品の主題・テーマ、あるいは作品の背景的装置の形成に深く関連していることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This research focused on the visual culture invented in the 19th century, such as phantasmagoria, panorama, diorama, photography, World Exposition as a spectacle, and the influences that these visual devices exert on the viewpoint of American writers like Henry James and Nathaniel Hawthorne, and their literary themes and writing styles. As a result, the visual media aren't only introduced into works as mere gadgets, but turn out to be closely related to the nature of the characters in the works, the literary motifs, and the formation of cultural background in each novel.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：19世紀アメリカ文学 視覚文化 メディア スペクタクル 万国博覧会 ファンタズマゴリア パノラマ

1. 研究開始当初の背景

19世紀は「視覚中心主義」による「眼による統治」の時代と言える。1839年にLouis Jacques Mande Daguerreにより発明された銀板写真は、その最たる視覚媒体と位置付けられる。中村はこれを踏まえて、平成20年度～平成22年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「19世紀アメリカ文学に及ぼす写真の影響に関する多面的研究」(研究代表者：中村善雄)において、19世紀のアメリカ文学における写真の多様な特性(魔術的・疑似科学的特性、写実性、代理表象性、科学性、大量複製性)に焦点を当て、19世紀アメリカ作家の写真の受容形態、あるいは写真が作品内に担う役割について考察し、写真文化の視座から文学解釈を試みた。しかしながら、この研究課題を遂行する中で、新たな課題も生まれた。より統合的かつ包括的な歴史的文脈において、19世紀の視覚という問題を考察していく必要性が生じたのである。写真以前に隆盛を極めた大衆娯楽メディア(パノラマ・ディオラマ、ファンタズマゴリア、スペクタクルとしての万国博覧会など)も、19世紀の世界への眼差しに変革を齎したことは否定できない。写真と共に大衆の視覚の欲望を満たしたこれらの文化装置についても検証していくことで、19世紀全体の視覚と文学の問題を通時的に考察することが可能であるとの想いに至った。

しかし、大衆的視覚文化と19世紀アメリカ文学との研究は十分なされたとはいえない。それはこれらの視覚メディアがヨーロッパ(特にフランスやイギリス)に起因することが一因に挙げられる。実際、19世紀の視覚文化を扱った良書として次のような著書[Thomas Richards, *The Commodity Culture of Victorian England: Advertising and Spectacle, 1851-1914*. Stanford UP, 1990.やVanessa R. Schwartz, *Spectacular Realities: Early Mass Culture in Fin-de-Siecle Paris*. U of California P, 1998.]が挙げられるが、それらの書名から分かるように、ヨーロッパ偏重は否めない。また、19世紀の視覚文化的視座からの文学作品研究についても、フランスやイギリスの作家(Charles BaudelaireやCharles Dickensなど)との関係性から論じる研究は充実しているが、アメリカ文学の文脈の中でファンタズマゴリアやパノラマをキーワードとした一冊の図書はほとんど見られないのが現状である。しかし、本研究の参考とすべき図書はある。例えば、Dana Brand, *The Spectator and the City in Nineteenth Century American Literature*. (Cambridge UP, 2010)はWhitmanやPoe、Hawthorne作品のなかで都市をpanoramaやdioramaと見るフラヌールに焦点を当てている。Richard Salmonの*Henry James and the Culture of Publicity*. (Cambridge UP, 1997)は部分的に大衆視覚文化の視座からJames文学を論

じている。国内においては高山宏氏の一連の業績(特に『目の中の劇場』青土社)が視覚文化と文学作品を取り結ぶ学際的研究の先鞭と位置付けられ、本研究の大いなる参考となった。

このような研究背景及び視覚文化に関する先行研究を踏まえながら、本研究課題を推進していった。

2. 研究の目的

19世紀アメリカ作家達の大衆視覚文化に対する言及や反応、あるいは彼らの作品に織り込まれた直接的あるいは比喩的レベルでの視覚文化の影響とその視覚装置から派生する諸問題を包括的に検討し、19世紀アメリカ作家達の大衆視覚文化の受容形態について探ることを目的とした。これを効果的かつ論理的に行うため、視覚理論や文学批評理論を作品分析に転用した。

3. 研究の方法

研究方法

基本的な研究方法は国内外にて資料収集をして、原稿を執筆し、それを学会あるいは研究会にて発表し、他の研究者のアドバイスや意見を参考にして、発表原稿の修正あるいは内容の不備を補い、最終的には図書という形で研究成果を公開した。以下はその具体的な内容及び手順である。

(1)研究テーマに関するアメリカ文学作品及び視覚文化に関連する図書を購入し、また対象作家の視覚文化との関わりを歴史的側面から考察するために書簡、伝記等の図書を購入した。

(2)絶版の図書や購入が困難な図書、あるいは本務校に所蔵されていない雑誌論文等入手するために、国内主要大学にて資料収集を行ったり、本務校の複写サービスや図書貸借サービスを利用して、資料収集に努めた。

(3)国内では入手が困難な一次資料の収集及び視覚文化に関する直接的検証については海外(研究機関)にて行った。

平成23年度においては、夏季休暇を利用して、約2週間(8月上旬～8月下旬)にわたってパリ国立図書館やサント・ジュヌヴィエーヴ図書館といった公共図書機関を中心に、19世紀後半のパリ万博やパノラマといった光学装置に関する一次資料の収集、及び光学装置に関する直接的理解を深めるための調査をパリで行なった。

平成24、25年度の当初研究計画においては、ニューヨーク・ボストン(ニューヨーク市立図書館やハーバード大学など)やシカゴでの調査を予定していたが、今日の学問的流れの一つであるトランスアトランティック

な研究視座を視野に入れる必要性があり、24年度は当初予定を変更し、春季休暇の約3週間(3月上旬~下旬)にわたって、イタリアでの調査・研究をおこなった。Jamesの*Italian Hours*やHawthorneの紀行書*The French and Italian Notebooks*における叙述の現地調査も兼ねながら、HawthorneやJames研究に関連するイタリア各所(ベネチア、フィレンツェ、ローマ等)を現地視察し、特に視覚的資料となる素材の収集に努めた。

平成25年度においても春季休暇(3月上旬~下旬)において、ボストンを中心に資料収集並びに現地調査を行った。特にハーバード大学のワイドナー図書館では視覚を巡る全般的な資料を、ホートン図書館ではHawthorneやJamesの校正原稿や写真を、美術図書館ではカルト・ド・ヴィジットに関する資料を収集し、同館所属の学芸員ジョアンヌ・ブルーム女史の好意により、アメリカン・ルネサンス期の著名作家(人)のカルト・ド・ヴィジットのデジタル画像を得ることができた。また、マサチューセッツ歴史協会を訪れ、ボストンに関する歴史的資料を集め、メイン州にあるHawthorneの母校ボードン大学においては、ホーソン自身やマニング家、及びピーボディ姉妹に関する視覚的な資料を収集した。

(4)資料収集と同時に、Walter Benjaminのパスージュ論やJohn BergerやJonathan Craryの視覚論、Guy Debordのスペクタクル論やMichel Foucaultの(視覚の)権力学など、作品解釈への視覚理論や文学理論の転用を検討した。

(5)研究の諸段階において、研究成果をアメリカ文学・文化関連学会にて発表し、他の研究者からの意見やコメントを参考にフィードバックを行い、論文に修正・変更を加え、さらなる内容の充実を図っていった。特に、2011年10月に関西大学にて開催された日本アメリカ文学学会全国大会シンポジウムにおいては、「電灯、電信、スペクタクルヘンリー・ジェームズ作品にみるテクノロジーの表象」という題目で、電気によって彩られた都市空間がファンタズマゴリックなスペクタクル空間を生み出し、登場人物を魅了する様子を初期資本主義の宣伝広告の言説と絡めて、発表した。

4. 研究成果

ファンタズマゴリアやパノラマといった光学装置は、19世紀のアメリカ文学作品のなかで、いわばガジェット的に挿入されているので、一見作品解釈に大きな影響を与えていないように印象を与える。しかし、作品の性格付けや作品の基調を成す背景的装置として、大いなる影響を及ぼしている。Nathaniel Hawthorneは長編*The House of the Seven*

*Gables*において、モール家の井戸をファンタズマゴリアと描写しているが、そのことがモール一家のメスメリストとしての役割と相まって、この作品のロマンス小説的側面を強調している。またこの作品では眼差しのポリティックの系譜のなかで、メスメリズムの継承として銀板写真が位置づけられ、ピンチオン判事の死因巡る検証が銀板写真を基になされており、写真を使用した探偵小説的側面を有していることが指摘できる。また、Edgar Allan Poeの短編“The Fall of the House of Usher”においては、ファンタズマゴリアが主人公アッシャーの混乱した精神状態やアッシャー家の不安定かつ不気味な様子を醸しだすために使用されている。

特に本研究においては、Henry Jamesを対象作家として、以下のように、詳しく考察した。

パノラマ的世界と間接的体験

ヘンリー・ジェームズの“In the Cage”では、パノラマがヴィクトリア朝期の大衆の窃視行為との結びつきに焦点を当てた。郵便局の「檻」のなかに拘束された主人公たる女電報技手は矮小なフレームの中から外的世界を窃視するが、それは大衆がパノラマによって展開するスペクタクルを通じて、世界俯瞰の欲望を満たしたのと軌を一にする。「檻」は電報技手の疎外・逼塞を物語り、窃視行為でのみ外的世界と接触する女主人公の周縁性を露呈するが、一方でその周縁性は外界をパノラマのごとく俯瞰できる距離の保持を可能にした。また、「檻」は外界=パノラマ世界の危険から自己防衛する避難所としての機能を同時に持ち合わせ、他者に対して「関与」し、かつ「関与しない」というパラノイア的と防衛的という両面価値的側面を有しており、「檻」は皮肉にも「パノプティコン」的眼差しを向けることが可能な特権的ポジショナリティへと変換される。それは電報技手の見ることへの欲望と見られることへの恐怖を下敷きにしているが、みずからは安全な場所に留まりながら、パノラマを通じて間接的に外界世界と接触するポジショナリティは、今日のPCやテレビといったメディアと視聴者との関係と共通するものであることを明らかにした。

ファンタズマゴリックな眼差しと脱中心化

Jamesの小説*What Maisie Knew*の主人公であるMaisieは彼女の移動性に同調するように、彼女の目前に展開する眼差しも「ファンタズマゴリック」であると称されている。この眼差しはJames自身の視点にも通じる。彼はアメリカ再訪の印象記『アメリカの風景』において、20世紀初頭のニューヨークのファンタズマゴリックな都市の諸相に対して、自らを「自由な観察者」、「不安な分析家」、「完全に孤立した旅行者」、「内情に通じた生え抜きの住人」、「偶然、中を覗き込んだ敏感な市

民」という、多くの呼称になぞらえた、複数のポジショナリティに自らを位置づけ、都市の流動性を様々な角度から捉えようとした。それは、「目に映る様々な印象を多少なりとも矢継ぎ早にいただく」カメラ・アイ、あるいはファンタズマゴリックな眼差しと言える。自らを常に脱中心化し、距離をもって流転する対象を眺めるこの姿勢は彼の人生に通底しており、最晩年期のイギリスへの帰化に際しても、自らを「アウトサイダー」であると自認している。James のこの脱中心的/ファンタズマゴリックな眼差しは裏返すと、どこにも、何にも帰属しない、彼のトランスアトランティックなアイデンティティ、あるいは彼のノマド性を浮き彫りにし、移動を日常的営為とする現代社会の人々と共通するアイデンティティを James が有していることが指摘できる。

スペクタクルとしての万国博覧会

1851 年のロンドンの水晶宮に端を発する万国博覧会は、単なる物品の蒐集に留まらず、陳列された商品群を一つのスペクタクルとして見せる商品文化の始まりでもあった。その展示空間は百貨店に継承され、その顧客であるブルジョワ階級は商品陳列を家庭空間に持ち込んだ。この文化的流れを見事に敷衍し、作品化したものが James の *The Spoils of Ponton* である。この作品では商品を蒐集し、万博と称される、モナ・ブリッグストックが住むウォーターバスの居住空間と、至高の芸術作品の「博物館」と称されるゲレス夫人が住むポイントンの屋敷が対比されている。この二つの蒐集空間はモナとゲレス夫人の息子オーウェンの間の婚約・結婚によって接触し、この結婚によって、モナは至高の芸術空間に商品群を陳列し、万博化、あるいはデパート化を企図する。他方、ゲレス夫人はオーウェンとモナとの結婚破棄を画策することで、商品群の流入阻止と芸術領域の安泰を図る。モナによるポイントンの万博化と、それを阻止しようとするゲレス夫人の抵抗は、19 世紀後半の商品のスペクタクル化による芸術作品と商品との二項対立の動揺・攪乱と、視覚をめぐるヘゲモニー闘争を敷衍している。このせめぎ合いはポイントンの自己消滅によって幕を閉じるが、それは芸術作品の鑑賞対象としての地位独占の終焉と、19 世紀後半から起こった商品の大量消費時代への警告を物語っており、James は *The Spoils of Poynton* において商品文化と芸術との権力関係を描き出している。

<まとめと総括>

従来の視覚文化研究は、絵画や彫刻といった所謂高級文化が中心的主題であった。しかし、今日の文学研究が文化的視座からの学際的研究が多いこと、また表象文化論やカルチュラル・スタディーズの隆盛にみられるよう

に、それらの研究が大衆性・周縁性をキーワードとしていることは明らかである。本研究においてもこうした学問的潮流の一つとして、これまで視覚文化論のなかで軽視された、あるいは垂流とされた大衆的娯楽メディアとアメリカ文学が交差する結節点に生じる諸問題を取り扱った。

大衆的視覚メディアは、19 世紀アメリカ作家達の作品においてガジェット的に導入されているが、単なる小道具的役割に留まらず、登場人物の性質や作品の主題・テーマあるいは作品の背景的装置の形成に深く関連している。例えば、ファンタズマゴリアは作品の世界や主人公の目にする世界の現実性に対して疑問を生じさせ、ゴシック・ロマンスや心霊小説との結びつきに大きな役割を担う。万博はスペクタクル世界を現出させユートピア小説と結びつくが、その世界の背後に潜む広告宣伝といった初期資本主義社会の諸相を暴きだしている。

本研究は、狭義の意味で 19 世紀アメリカ文学と大衆視覚装置との関係性を取り結ぶ表象文化的研究の新たな地平を切り開くことを目指し、広義の意味ではメディアと言葉の問題を取り扱う研究として意義づけようと試みた。今後 19 世紀のアメリカ作家全体に研究の射程を広げ、さらに 20 世紀の大衆娯楽メディアのひとつに位置づけられる映画と文学に関する研究との接続を図り、視覚メディアと文学との通時的研究へと発展させていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

中村善雄「サイエンス・フィクションとしての「瘧」 エイルマーは人造人間の夢を見るか?」『ホーソー研究』1(2014): pp.87-92.

中村善雄「『ミケランジェロの暗号』 ユダヤ的ユーモアと動揺するアイデンティティ」『シュレミール』11(2012): pp.63-68.

[学会発表](計 8 件)

中村善雄、「結婚とユダヤ系文学」第 23 回ユダヤ系作家研究会シンポジウム、ノートルダム清心女子大学、2014 年 3 月 29 日

中村善雄、「19 世紀の鉄道表象とアメリカ文学」第 28 回異文化情報ネクサス研究会定例研究会、至学館大学、2013 年 8 月 24 日

中村善雄、「「天国行き鉄道」を読む」日本ナサニエル・ホーソー協会第 32 回全国大会ワークショップ、仙台国際センター 2013 年 5 月 24 日

中村善雄、シンポジウム「笑いとユーモアのユダヤ文学」中・四国アメリカ文学会第 41 回大会 広島大学 2012 年 6 月 10 日

中村善雄, 研究発表「19世紀の大衆的視
覚文化と眼差しの変容」異文化情報ネクサ
ス研究会定例会 ノートルダム清心女子
大学 2012年8月25日

中村善雄, シンポジウム「コミュニケーショ
ン・リテラシーの諸相 - 多価値な時代のア
ナログ知 - 」異文化情報ネクサス研究会年
次大会 共立女子短期大学 2012年12月
15日

中村善雄「電灯、電信、スペクタクル ヘ
ンリー・ジェームズ作品にみるテクノロジー
の表象」日本アメリカ文学学会全国大会シ
ンポジウム 関西大学 2011年10月9日

中村善雄「電気のアルケオロジー “ In
the Cage ” にみる意識の変容と想像力」日
本アメリカ文学学会関西支部例会(ミニシ
ンポジウム)神戸大学 2011年7月9日

〔図書〕(計 7 件)

中村善雄, 他, 『越境する女—19世紀アメリ
カ女性作家たちの挑戦』開文社, pp.46-65.

中村善雄, 他, 『ユダヤ系文学に見る教育の
光と影』大阪教育図書, 2014, pp.137-153.

中村善雄, 他, 『水と光 アメリカ文学の原
点を探る』開文社, 2013, pp.157-175.

中村善雄, 他, 『新イディッシュ語の喜び』
大阪教育図書, 2013, pp. 408-452.

中村善雄, 他, 『ヘンリー・ジェームズ『悲
劇の詩神』を読む』彩流社, 2012, pp. 39-66.

中村善雄, 他, 『ヘンリー・ジェームズ短編
選集』関西大学出版部, 2012, pp. 167-196.

中村善雄, 他, 『笑いとユーモアのユダヤ文
学』南雲堂, 2012, pp.236-256.

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 善雄 (NAKAMURA YOSHIO)

ノートルダム清心女子大学・文学部・准
教授

研究者番号：00361931

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：